

AAALA ニュース 第 132 号 短信欄

* 田中さんからの報告です

228 号に掲載した「南からみたウクライナ戦争」について掲載したマンスリー・レビューに翻訳の了解を求めたところ、エディターと著者から了解のメッセージがきたので、以下のようにお礼をつたえました。

Dear Tanaka San, I am Krishen Mehta and the author of the article mentioned. As James has mentioned, please feel free to translate the article into Japanese and to publish it. I am honored that you would like to do so. Japan is near and dear to my heart.

I would appreciate it if you could send me a link to the Japanese version of the article once it is published. Also, a current photograph is attached if you may want to use it with the article.

Thanks and regards,
Krishen.

Dear Mehta san

Thank you for your friendly message. Kindly find my translation (Attached). I was very happy when I read your piece in the Monthly Review.

Because it was coincident with what we had been discussing with the experts just prior to that time on the attitude of the Global South on Ukrainian war. I was very impressed with the way you laid out the issues as if you had been at our discussion.

As you know, the corporate media in Japan is full of condemnation of Russia, and even within our own organization, the debate is divided. We are encouraged by the Global South's non-aligned and neutral posture. So I am looking forward to hearing your further guidance and cooperation. You can find following link of our website which carries the translation.

Best regards
Yasuhiro Tanaka

山崎先生のコメント

今日は、1920 年代、30 年代に、コミンテルンが創設されたばかりのブラジル共産党に二段階革命路線の指導をしながら、反ファシズムの民族解放同盟 (ANL) をつくっていくあたりを、3 月のある研究会での報告用にまとめてました。テネンテ (青年将校) 出身のルイス・カルロス・プレステスが 1934 年にブラジル共産党に入党したあたりから、ブラジル共産党の性格が、階級闘争から反帝・民族自立路線へ、民主化優先の路線におおきく変わったみたい

です。
プレステス自身は、1924 年のテネンテの反乱の指導者 (陸軍にいた) で、そのため、反乱が鎮圧されたのちにボリビアに亡命し、そこでブラジル共産党の創立メンバーに会って共産主義の洗礼を受けました。でも入党までは時間

がかかりました。ところで 1922 年のブラジル共産党の創立メンバーはアナキストが大半で、それはラテンアメリカの共産党としては例外的のようです。

建築の世界的スーパースター、オスカー・ニーマイヤーは、1991 年のソ連系共産党の分裂のときに、火中の栗をひろって代表になり、再建（選管への共産党としての再登録）に奔走されました。彼はブラジル共産党（ソ連系）の一番しんどい時期の、嫌な仕事を引き受けた人ですね。このとき、1992 年に共産党を抜けた人が PPS(社会人民党)をつくり、さらに最近には市民（CIDA）などに党名を変えました。オスカー・ニーマイヤーはそちらの社民化グループにはいかず、社民化を第 9 回党大会で批判し、ブラジル共産党としての再登録に奔走されました。

山崎圭一拝

* 新藤さんからの短信です。

マンスリー・レビュー 第 74 巻第 10 号（2023 年 3 月発行）に掲載された、スティーブ・エルナーの論文「ラテンアメリカのピンクタイトの評価では米帝国主義を優先とする」を紹介します。

マンスリー・レビュー 第 74 巻第 10 号（2023 年 3 月発行）
スティーブ・エルナー著

ピンクタイトとして知られるラテンアメリカの進歩的政府の波に対する 2 つの相反する左派の立場は、この 20 年間でますます明確になってきた。ベネズエラのニコラス・マドゥーロ、エクアドルのラファエル・コレア、ボリビアのエボ・モラレス、ブラジルのルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルバ（ルーラ）など、ピンクタイトの大統領を保守・右派の指導者と同じカテゴリーに入れることがあるほどである。一方の立場は支持し、他方は非常に批判的な立場である。

その違いの根底にあるのは、帝国主義という問題である。この議論から浮かび上がる重要な問いは、最も重要な意味を持っている。ウクライナ戦争をどう見るにせよ、アメリカ帝国主義との闘いは、世界的に左翼の最優先課題であろう。もしそうだとすれば、米国の干渉主義にさらされ、それに抵抗してきたピンクタイト政権への揺るぎない支持は、特に重要である。

本号はウクライナ特集の皺寄せで、新藤さんのラテンアメリカ関係評論が満載になってしまいました。本編は次号に掲載したいと思います。

* ベン・ノートンの人気記事

ベン・ノートンの書いた記事を訳していたら、文末に「ベン・ノートンの人気記事 ベストテン」というのがあった。

<https://geopoliticeconomy.com/2023/04/06/dedollarization-china-russia-brazil-asean/>

いずれも2023年になってからの記事である。この人は評論家とか科学者と言うよりも、精力的なジャーナリストという性格の人だ。底は深くはないが勘は鋭い。日本でいうと田中宇さんのような存在か。

面倒なのでいちいちリンクは貼らない。英題名をグーグル窓に入れて検索してください。

1 . 地政学のゲームチェンジャー：中国のイラン・サウジ和平合意は米国経済覇権への大きな打撃となる

Geopolitical game changer: China's Iran-Saudi peace deal is big blow to petrodollar and US economic hegemony

2 . 「メキシコは米国の植民地ではない！」：AMLO が侵略の脅威を非難し、石油とリチウムの国有化を祝う

'Mexico is not a US colony!': AMLO condemns invasion threats, celebrates nationalization of oil, lithium

3 . シリコンバレーと銀行は米政府に救済された。それは富裕な寡占層への贈り物だ

US government bailout of Silicon Valley and banks is \$300B gift to rich oligarchs

4 . 世界（中国、ロシア、ブラジル、ASEAN）が米ドル離れしている

Countries worldwide are dropping the US dollar: De-dollarization in China, Russia, Brazil, ASEAN

5 . ドイツ左翼党議員、「核はいらない。米兵は自国から去れ」と発言

German leftist lawmaker says US soldiers and nukes must leave her country

6 . パキスタンのクーデター政権、イムラン・カーン逮捕を図るも、民衆抗議に直面

Pakistan's coup regime tries to arrest Imran Khan – but faces massive popular resistance

7 . 中国&ロシア、「100年ぶりの社会変化」を約束：米ドルの覇権を標的に

China & Russia pledge 'changes not seen in 100 years': Xi & Putin take aim at US dollar hegemony

8 . ホンジュラスが中国を承認 - 残るは12の小国のみ

Taiwan separatists lose key ally, Honduras recognizes China – just 12 small countries remain

9. 「ハバナシンドローム」の研究に数百万ドルが費されるが、その存在すら証明できず

The U.S. is spending millions on 'Havana Syndrome' research – but it's not clear if it exists

10. AMLO 大統領、「民主化」サミットで米国の「寡占支配」を痛烈に批判
Mexico's AMLO calls out US 'oligarchy' at Biden's 'democracy' summit

*大村 哲さんからの紹介です

“ヨーロッパの知性” 経済学者 ジャック・アタリ氏 全文インタビュー

<https://www.nhk.jp/p/kokusaihoudou/ts/8M689W8RVX/blog/bl/pNjPgEOXyv/bp/pVp5XDv5IK/?cid=-bs22hk-tw-230407>

とても、良い発言だったと思いました。

皆様の立場によって評価は様々で異論を述べられる方もいらっしゃると思いますが。

ALA の皆様(BCC)

地球温暖化が国際政治の場に登場してから 35 年経ちました。マスコミは気候危機を煽っていて、人類が出す CO2 が地球温暖化の原因との説が、世論を支配しています。でも実際の CO2 排出削減は進んでいません。2030 年に排出半減なんて夢のまた夢です。

杉山大志・木村史子チームが精力的に外国の地球温暖化論文を翻訳して紹介している。

今回の著者リチャード・リンゼンは、MIT のアルフレッド・P・スローン記念名誉教授（大気科学）である。リチャード・リンゼンの主張は、従来の地球温暖化説は地球を 1 次元的にしか見ていない。地球を理解するには 3 次元的に、対流を含めて理解すべきである。そのためには流体力学の手法を活用すべきである、というものでした。

===

概要

1. 一般的な説
2. 地球の温度とは？
3. 地球の気候はどうなっているのか？
4. 熱帯と極域の温度差はどうやって決まるのか？
5. 熱帯の気温に安定性をもたらすものは何か？
6. CO2 は気候のどこに関わっているのか？
7. 影響
8. 私たちはどこに向かっているのか

===

『温室効果を再考する』『従来の地球温暖化説は正しいのか』を読んで感じたことは以下。

懐疑論者と言われていた先駆者、東工大の丸山茂徳、アラスカ大学の赤祖父俊一らは、他の学問分野の世界的権威でした。だから、世の中に広まった地球温暖化 CO2 原因説を、外在的に批判してきました。今回、杉山大志・木村史子チームが翻訳紹介した外国の 2 編の論文は、気候科学の内部に入り込んだ内在的な批判になっていました。世の中、時間が進むと、批判方法も大進歩するのですね。ご参考まで。